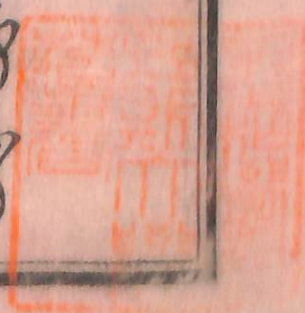


吟  
步  
集  
全

911.3
キ



蜀道の旅のたをの〜く又傳〜きるもり  
 たるはのし〜は此其の後の風英雅を  
 思ふ立るを吉ると〜笠着る字難を起  
 志也〜よまきとらやく西原よ出る風山  
 ふ〜聖なるをを見ぬ〜里浪の森より  
 橋の夕風は旅のあはれをさす〜



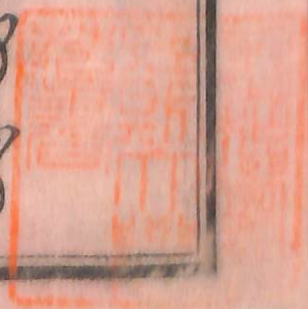
明治十六年癸未刻成

# 吟歩集

弄月園藏板



羈旅のたをの〜〜又徳〜きるもりあり  
 たるわい〜は此毒お後の唯風英雅を  
 思ふまゝを去る〜〜並着る〜字難を起  
 志ある〜よまよらやく西条よ出る〜風山  
 ふ〜野むらむを見ぬ〜里浪〜森よ〜り  
 橋〜の夕風〜旅めぬ〜を〜り



高野山よ詣るる父母我あをまかりて  
伊勢の大御神よぬのしきこゝろふまの  
後をみゆははは東の原よ飛らる河田川  
能流せよ汗をこくくかくし伊勢よ  
松島よ初月を賞しやうと松園の  
月よ枕をこころとせられ伊勢道と  
尋ねるる風人もあはく句ぬき名あは

かき代贈答見ゆのあはれ一  
綴とて子後の思ひ出州よせん  
とて及しと遊せむとあは業を  
とて年と志の事

明治十五年一月

芥 倉



送  
青  
園  
主人  
書

神虎志



吟歩集

明治十四年二月廿二日の良辰を携て年次宿願  
の三府遊歴の首途をこよみおぼしむるやうに  
なす見送りの人々よるをたずなり何とせよ  
あきほを帰程をゆるしをるる

とま初る林の先より笑ふ山 峰風  
河より日暮も 心とよたき 春 景山  
花の傍新に 夢中 嘯り 暮 露垂



めつとふうとて書けぬ宿帳 車友  
 越後屋の衣代といはぬ御書  
 さうね川原より多し知己 採花女  
 ぬるるの歌くあはとの結草き 伝葉  
 踊りのうた釣るはりの針鉄 葉笠  
 乙女は残り少くは能の月 蓮亭  
 箒をとり知る 指先は冷 花朝女  
 油をる志めるたふき栴の實 精知  
 机ハ出さるあれと留まら 松権  
 二二のよせまうり 言能柱とを 菖水

日頃の清きまよふと長途の舟せをこころ  
 家窓の花を寒りよ 柳 入 峰 風  
 風は多かりよ 延き 黄 鳥 凄 冷  
 中々なきおろり帯をうき 春 足 草 芹 春  
 大いなる乾く土蔵の中 漆 卜 翁



月結よきうららの拭掃除 青柳

巻ふりしり能枯 露おく 繪巻

うら枯る 翁よあのく かしき所 南歌

河よ怖るや 吼うる 大 流葉

墨深の神よまらき くらあらし 万 院

乳親 いらの 文は多しく 友之

表居り内を歩 走るあつらふ 素淡

梅のうらうらよ 冬を 縮む 杜若

降るのおもひやう 九里ふらよ 兼 破

夢ぬ先うらうら くらあらし 打 清江

いそりいそりい 煙を 巻ぬ 森道

道 弱よ ゆる 宿の 割え 物 展

あつらふらうら あき 波の 月 疎る

かき入ふくまむ 初層 此 敷 月 野

多年の宿願をきく三府をたゞしうり品証古蹟を  
採らざる峰風詞哲言をとりて首途をいそ  
ぐのめをあく。

多うりせよ都の急を見りかたり 素山

都の暮よおくせしと重途もゆきもけし歴の  
杖をとりて峰風詞哲言採りて首途をいそ  
ぐのめをあく。

是よりけし重途も履の急を揺りかたり 橋本

弄月園字匠三府遊歴の首途をおく。

是明也 東へ其妻を花と月 奉教田 病垂

旅をききお世をよむの暇のけり 如耕  
帰るもあふもそつせやあよ 花嶺  
引替やをせもそ途をさす 良和  
峰風大人の旅行を記す

弄月園先生の上京を見送り作りし 二葉  
舞ふ鶴もそをうけり 天の旅 遊平  
風流をいりやあまの詠をうけり 新洲  
舟の尾よけをけり 京の空 淇山  
出陣きあせめり 橋本

出陣きあせめり 橋本 蘭二

時の路徑を履して上京の杖を束んずる御

あつちせし

中へ降よそ途の雪敷にどかき 月野

師翁の遊歴せし路よ首途を遠く見送る

と秋枝のうらやまよよ京の是 守謙

嘆ゆく時そ遠や路よ舞ふり如 凌雲

手をむら繁りや梅の節かをり 里氏

りよさちりぬの起りては旅 然知

手よ枝よおくるや梅よ美り雪 素永

見送るや都一の是は吟一と 磯行

永き日を伊よ雪をん留まらうと 有休

春日園海峽諸州の名垣意深の重景をささるけふみよ

年より海文書よ志く一と秋のきよ一 諸君あよ値遇し

中道の世種よせんふと日頃の茶話ありしと因と縁と此

熟し路よよや果しとやや中世杖をとりよ馬の銜

をほきよつり

御代しと新しきそよ梅 森 弄山

こころにそよ枝をひそのうと羽後の御指

峰風霜の袖をひのうと

黄衣の道りしと今此神書り如 秋后 露月

顔の花よいそこのうへ 峰風詞家の杖よとけり

能風漢景あつた

そこのうへ 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

峰風詞家うへ 杖よとけり

うらやま 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

峰風先生の旅籠を語らむ

杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

峰風雅哲の陣圖よ再會を契りて

杖よとけり

杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

峰風丈人送別

杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

峰風詞長草庵を語らむ

杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

峰風詞長旅籠を語らむ

杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり 杖よとけり

峰風先生

又舟をせ小船のちほれ嵐山 輝白

峰風雅兄西京への舟りて津風を此風交り流るる  
たまに舟一國を思ふ侍りぬ

舟りて津風を思ふ侍りぬ 卜為

西京に羈旅に峰風詞伯の遊秋を想ふ侍りぬ

舟りて津風を思ふ侍りぬ 信長 凌冬

峰風老人とある別荘の庭にありて

舟りて津風を思ふ侍りぬ 大信 潮水

峰風の浪をよきせらるるふとく侍りぬ

舟りて津風を思ふ侍りぬ 南歌

舟りて津風を思ふ侍りぬ

舟りて津風を思ふ侍りぬ 流黄

舟りて津風を思ふ侍りぬ

舟りて津風を思ふ侍りぬ 碧柳

舟りて津風を思ふ侍りぬ

舟りて津風を思ふ侍りぬ 嵐外

舟りて津風を思ふ侍りぬ 芹水

送別 袖舞 見送る 舟りて津風を思ふ侍りぬ 朝色

舟りて津風を思ふ侍りぬ

舟りて津風を思ふ侍りぬ 任勢 舟中

大原よ余拜の折梅舞社をふくむを寄る羽後の  
弄月園うゝをわたり

袖のつゝ 多葉の蔭や秋志を

果 蕉

葉梅のうけや志をのぞき

雲 兆

望風夫人秋意を訪をせしをりかきよの

を秋かきよはくををぬく名跡を

うきを秋しよとよのり 笑う旅

尾張 疎 雨

叶底の望風よ望風美をうめ

今秋をすしよしきもはけぬを晴

静 心

望風を訪をうゝ羽後の望風老をえ送る

望風うゝもやをうゝよ 笑うとよ作り

清 見

うきを秋しよとよのり 笑う旅

望風光臨の葉を辱うせしめ

まつりやむを秋あぬ麦の霜 石 友

送別

梅檀のそや子枝の屋 水 露 木 潤

羽後の園秋田の神人秋望風夫人の望風を訪をせける時

手はくりの秋葉ようの秋を秋をうゝ 三 巻

秋田の望風うゝの望風を訪をせしめ

白梅よ新葉を瓶の口を秋よ 洋 三

秋田の望風老人西遊のうゝを我を海道の秋の秋を

踏車くらせ強河着枝ある村田氏は訪あうは驛  
此よりやうよ年以の風流あるより此の如きハ水車月  
中の四日風多る都り是あたれ其いひくう中田の里より入る

跡より後富士より西へ寄るはせけ里 尾庄 祖原  
峰風波遠路の杖をひいてけりよ

若くは野山よりくまのり 珠河 若くは  
峰風老人は杖をこころうと

屋敷より是は清きことくわのれく柳 吉清  
洞の峰風も春を年見の交う清くをせれり  
あも一之府屋後の路は序より静茶のりす州の町を

訪をせりせりもふ一り此れは清きことくわのれく柳  
より故ありてはちよ解き言はけり由是より  
よく風は静而くまのり 乙彦  
うねり結りかたり一秋田の峰風洞宗西進の帳  
途野丘の草深なる家富原を宿とせけるよ  
あも一

風をくまのり お祥 十湖  
庭月峰風静見の帰杖をさうり  
風をくまのり お祥 吉清

峰風雅集の帰作せしむ一別の餘よ

涼風よとて送るう一何まうと暮 志系 等哉

峰風雅集の送別よ

送らるや暮る扇も見えぬ中々 春 湖

別後の峰風又人をあつらふ

別う中や何の事か聞きては別れ 等 意

種あけし回を見らるや如くは立 葉 雅

去る風を去るうよとての秋うめ 精 志

夏の月影あつらふ夜山 成 雅

是くをよとてせしむる 點 平

峰風雅集の帰作せしむるを送る

うの秋をよとて行きては 片 山

秋島のやうな秋 晚 香

風よ春のつら 文 雅

旅をよとて内は 芳 泉

峰風先生送別

去る風をよとて 花 雅

去る 芳 泉

峰風雅集の送別へ

あつらふ 探 花



相後の雅賢唯風ゆよ子庭を訪はる

州の宿意せし風のこをりり事 謝社

美面ゆきれけはハ

天を結ぶきし新原ゆき露しき 富水

細道を結ぶき古く入神しき唯風唯風をうらむまじし

田植ゆき名取の里を旅寐しき 永核

日光あゆむ白川の冥より塔竈相寄りしき

古船へゆんしき唯風唯風出人をあくる

結ぶゆきしき 浮風のま水しき 幹能

あつた結ぶゆきありけるおら唯風唯風よ通遊しき

と里しき結ぶの友を結りしき 蓮河

東京まきの日およく唯風老兄と寄はしき

いつとあくるけりかきりぬ袖り 堀 上毛 為治

西遊南遊しき東京よ本より本を遊しきおはま

唯風唯風老人を祝はす

唯風の遊子まきしきやうしき 涼坪 試着

我地の利根川解料理せしきやと思ふしき名あましき

系しきしきしき粗着をまきしきしき送分の際しき

流し解度下のあまきしきあまきしき 文種

涼き哉 涼き男もなき別りぬ 楓雪

夜日 望風 難伯の西遊の神 詠よ遠き

道くのそぬ 涼き 瑞原 舞 老成 牡丹

阿く 遠き 望風 変う 詠よ 遠き 舞 老成

わく 望風 思ひ 詠よ 舞 仙臺 杉 葉

予は 望風 舞 舞 既よ 十有餘年の 望風 舞

杉 葉 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

然る 望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

是れ 望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

年 望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

望風 老人 舞 舞

望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

望風 老人 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

望風 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

峰風子其來家之遊境思ひ之世伊勢幸詣を願ふ

懐岐考平社よもむの御心を運て此方時法广の石名

松田路の懐もあはれをまのの風あをる厚く訪ふ君ら世

七月下旬若き此をうむおぼくをうむの御座せしむ

厚きより越さぬく六老の身も飛之より思ひ守

水つりり言はくされを忘るる松 伊子 号居

吟風先生今年三府を遊歴ありて家四國路迄

日くらすし一し一神の國の後文を若らるるよ

隣より其ことおまぬお徳の御 五作 松 塘

峰風子其來懐のたのまはし

松島のおもたけいりよあらしをん 五若

森月園遊見をり西遊をて名居をめり

たまひて目もな神へ居りしを祝ま

席の居やるもあらしも是の勢 音 号 在

是の旅路よ此秋を實せし峰風雅伯の御七月

下旬又神座のあしりを受り

はらけり旅ふらひりよ月と音 号 海

峰風宗匠の旅路一もあはれをうむる御座し候

竹せよはらけりよあしりを受り 音 号 乙 人

望風夫人の名古屋へありあけけよ聲度ハ是の如  
く一と高又高何よけし居客をを物清のうへ意をまじ  
國産をのこきよみえさう一物をを一と成のうへ

折角此味よとけし一と秋田為 神 志

五日望風夫人家族遊を回り一在子之月菰葉西南

中の靈地を巡り清事の御友を訪ひ十分の風流を事 あつこの

日敷を信ず初秋の月高き御基よ御館らまを祝し

月高を圓のこけき也 長 丈丈 素 功

初後の望風士取一物よ速る目高度御座を祝し

早きみのさうさう一とえぬ紫苑う丸 三 楓

望風夫人の名古屋へありあけけよ聲度ハ是の如  
く一と高又高何よけし居客をを物清のうへ意をまじ

生憎よとせし甲斐高一兼月共 この 清

望風御長の金城を通り一秋の月を訪らる

啼きよとせし是 あつこの 福 務

望風老孫我位英流の園を通車のおりゆきとち

こいし拜福しとせし

望風老孫我位英流の園を通車のおりゆきとち 美法 竹 虫

望風老孫我位英流の園を通車のおりゆきとち

先きよしよ若る過ぬ 野 旅 の 一 を 福 堂

芳時は花をばはめとてさるるの何勢より捕ふ  
を廻り相島家深のたつ月と百余日縁地を接りて  
美き帰園ありける峰風大人を祝して

月夜は後やゆくせん旅はさるる かき 重袋

さるる花のほろり遊歴せらるる峰風大人の

ほろりあき神座をうらやむ

萩の長と芳時の曇り見とまん 甫立

少得とては捨てるる粟の敷 雪舟

峰風先生の帰藩を賀して

何れよりよち争ぬをより座の道 更隣

弄舟園詞字の文章を弄す

秋をめぐりては出ぬの旅はさるる 胎相

その祖翁此言とては東海をのりてはしる見まん  
風雅の情よりとて美は宜きそのゆかりは都にのみ  
其余縁景の地はあきくをゆるる弄月園の主人道は  
年の初を待て今とて三府を始め諸所は名跡を揮  
百數十日やとてさるる神座せらるるとて又旅は  
なつらそを写しし旅を打てうらさき雲影をよらるる

満つる風のかたより 詠 とら 然

於清一志のきつる能紀川 粟 碩水

みふえゆるをよるげはすの山 指山

あしむよる董とつらや 葉壁 百可

旅人もあきく寝り旅の指笠 梅翁

旅もまじくは夜二夜を帰地 碑山

花の傘 美せとやうき峰の松 荷童

名のと水も名は為りき 喜水旅 橋孝

茶のめりよ浮州 ちぬちく 翁 一蘆

与木木の葉皆梅より 智思院 雨徳

暖味の夜も花よりききく物より 振下

大り枝や雪の中より若の春 折後

中々ききき帰やりの入りり 山 大石 似水

辛味の時も白くも 文海

ととる灯は涼しくありぬ 赤山 枕花

岸のふきき芳性のそよや 大和 水石

今宵とく月は浅きや 淵田の橋 司水

襟形や 益島をり上 信 松翁

旅も終つて 長 梅翁

より一燈の星のりりよ 星 出川



一海より入るる御船のせぬよふ御船 車馬  
 此ののあるよふのよふ宿屋の掛角 菊庵  
 之御船の山もささるよふ御船 葵島  
 子のだんを船もささる御船 昌長  
 時を浮舟もささる御船 半仙  
 望つるよふささる御船 新村  
 竹秋のおよふささる御船 重秀  
 富山の海舟のささる御船 秋圃  
 蓮舟のよふささる御船 桂女  
 空より入るる御船のよふ御船 九成

舟をささる 自也水のく福田川 竹良  
 此ののささる 福河よささる御船 寸松  
 舟のよふささる 舟のよふ御船 左岳  
 富土のよふささる 舟のよふ御船 連水  
 友伴のよふささる 舟のよふ御船 閑茶  
 初書ゆいよふささる 舟のよふ御船 詢堯翁  
 藤原のよふささる 舟のよふ御船 二海  
 波押のよふささる 舟のよふ御船 素石  
 舟のよふささる 舟のよふ御船 局江



筑波松如見えたる藤原の了風露我 月若  
 朝夕のちあやむ二見をまのり日の出 春水  
 故春たるまきよの夜ぬる詠箋のちぬ 吳仙  
 伴保姫のまきよしうらうら筑波の山 松年  
 三園やちる花のこころは 船を霧 ト早  
 ゆりしちや屋敷の虫さきうらま味の真 曉斎  
 年まじ也物をもてるるのみやふも 平雲  
 詠歌のまきよの志をまじや部公 完徳  
 まきよしちや酒のうらうら 夕心 詩竹  
 藤原のまきよの志をまじ 秋の籾 松燈

雑子啼や荒城のりけ算の如 健  
 馬の鳴や春草の波もあやむ 年若  
 重なるまきよの志をまじ 左年  
 まきよしちや酒のうらうら 生花  
 阿ふらうふ酒のまきよ 二京  
 さきよしちや酒のうらうら 鹿南  
 故春たるまきよの夜ぬる詠箋のちぬ 松年  
 見まきよの志をまじ 柳茶  
 吟まきよの志をまじ 大春  
 春の夜や付まきよの志をまじ 松燈

黄きも新瑞はくもや小梅村 良大  
 雪をく風葉くくく 少雪の山 尋香  
 今も多くくくくくくくく 化粧坂 我茶 可香  
 旅先のすうやや反り新月夜 月梅  
 夢よきよ起けハ峰も花は子 月梅  
 伊予もくくくくくくくく 柳之丸 醒玉  
 言くくくくくくくく 信くき家しんく 白友  
 幸しめ花り如氷り如歌の浦 幻史  
 旅雲へ流雲をくくくく子松島 上徳 一徳  
 くくくくくくくく 覚悟の梅見くく 竹村

江の島能登り新山や波の花 下徳 旭島  
 小一垣をきくくくくく 梅は花 和親  
 海をくくくくくくくく くら松 汎梨  
 海よりくくくくくく 乙 瓢  
 雪ちくくくくくく 石二の山 桑古  
 雪ちくくくくくく 州の雪 梅向  
 葉のくくくくくく 海くく 下毛 茂精  
 旅ちくくくくくく 州 信徳 藤卷  
 旅秋をくくくく 州 其跡  
 是も又旅先の友よ起くくく 松候

海まきまの万里雪のふゆ川 樂二  
 了當る 咽もめくら 鳴海 浮 雲 主  
 新よきや 夏もそとく 秋も 賢 外  
 新志のぬあけ 酒や 飯 屋 隣 交 器  
 新く ちり 帯 古 衣 衣 神 松 魚 守 朴  
 新く ちり ちり 我 名 新 ち 理 心 竹 蕙  
 黄衣の 聲 換 古 衣 衣 ち 善 川 様  
 州 ちり ぬゆせ 和 紫 苑 の 言 ち 信 じ 一 芳  
 吹 ち くる ち 然 神 風 衣 信 信 の 秋 雪 浪

遠 幸 世 々 喜 田 山 表 一 弥 彦 山 梁 唐  
 毎 ち の 遊 ち 心 照 ち ち ち 志 志 ち の ち 危 儀  
 ち ち ち の 湯 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 危 不  
 危 ち ち ち ち 清 ち ち ち ち ち 子 曲 川 危 月  
 ち ち ち の 庭 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 危 遊  
 ち ち ち の 山 ち ち ち ち ち ち ち ち 危 景  
 舞 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 危 景  
 嘯 ち の 今 ち ち ち ち ち ち 危 景  
 仰 ち ち ち ち ち ち ち ち ち 危 景  
 言 ち ち ち ち ち ち ち ち 危 景

恒あきくふきき 柳田 蘇蘇味 而哺  
 月を〜信打を能く 漢路 島 柳 壺  
 梅 常 都 ちのきを交う 蘇蘇代 徳 城  
 船 出 せ ぬ の 噴 あり 揚 綱 葉 五  
 風 の 色 又 しく 牡丹 の 目 取 う 水 花 交 女  
 柳 小 秋 を 志 う ても や 霞 の 暮 しく 明 葉 史  
 町 寺 暮 しく 赤 雲 也 佃 沖 南 山  
 宮 城 野 也 秋 の 錦 を 伊 達 推 極 弘 村  
 麦 秋 の 人 小 雨 少 也 あり 山 芳 酒  
 市 へ 入 り 舟 子 と 鯨 名 夕 看 有 川

昔 あり 也 とも け ち ち 登 旅 籠 素 更  
 志 しく あり あり の 夕 日 也 浮 四 堂 舟 山  
 和 名 しく 水 暮 しく 志 の 河 へ 山 幾  
 不 思 の 暮 け け け 也 登 の 暮 鹿 井  
 志 しく 暮 しく 志 の け 暮 の 暮 け け 湖 南  
 味 け け け あり あり 所 也 舟 の 暮 阿 山  
 志 柳 也 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 文 曉  
 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 居 風  
 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 梨 春  
 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 暮 しく 重 江

天詔や 櫻を七宵の月見臺 舞臺  
 真言一 櫻を七宵の 五紐山 十水  
 若船や 波を七宵の 桂川 一の宮  
 道へ中 露を七宵の 詠 祝 珂水  
 櫻雪を七宵の 月見を七宵の 京の町 連梅  
 管を七宵の 月見を七宵の 天の川 華陽  
 詠を七宵の 詠を七宵の 牡丹を 詠 舞  
 七宵の 詠を七宵の 方は 星を七宵の ぬ 詠  
 果古を 詠を七宵の 方は 星を七宵の ぬ 詠

詠を七宵の 人よ及よぬ 浮葉を七宵の 友和  
 七宵の 夜を七宵の 酒を七宵の 詠 石 子之  
 月を七宵の 詠を七宵の 夕暮を七宵の 夜 葉山  
 白山や 詠を七宵の 詠を七宵の 梅を七宵の 布白  
 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 加茂系 仙光  
 海棠や 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 志  
 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 壽川  
 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 貞夫  
 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 一也  
 月を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 詠を七宵の 帯泉

風好しと云ふ名を似き嵐山 風好  
 高砂の浦北野や日のそよめ 原哉  
 龍光の梅本に流すやしら白浪く 青峰

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

旅中漫吟

弄月園吟風

妻也と従妹とみ家僕五祐を携ひ同行 四人旅お  
 遊覧の首途一帯の時

春うせしとてやまをさし旅さして  
 ありての糸の白くを仰たる在城邑の誰う世中人途  
 中よりかきくも同行八人ともうぬるさそひて杖をさし

春風や連の多きよ 詠めりよ  
 久保田留別 ありてり名あくる人を見しうへを徒

秋田河邊の兩郡を過る由利郡よ今

河原まゝも是の種を採りて

瑞古 家傳や浪さくもなき真水

宮内海船 真水一之宮せしむ船の中

秋田縣久保甲より山形縣野田まで行程三十有餘里

始終此山の種をゆく

鳥海のふりて越えし修善寺の郡

聖代の有るべき事

長年をやく採りしる家 嵐々集

越後國岩船郡不動峰を越えし時風雪を後よ人を見

雪降し修善寺の真水 似ぬ峰

村上町法隆寺の靈應よりしる

旅亭せ採りしるよ 忘れしる

新庄藩市街 家傳の影しる 真水の川

途上此目 浪さくもなき 風さや信濃川

書解もなき 一之宮 跡彦山

よく修善寺の名ゆるりわしる 真水

水城跡 真水の影しる 真水の海

麓嶺の名物ありし 頭城跡 鉢崎野

はまき 漁者ありし 汁

信濃國内務 東風さむく 雲帷のふゆ

善光寺 并 帳よ 何れも 長馬車に 籠る

甲越両軍 救回 戦年 といふ 川中 あり

兵の 魂も うつ せん 梅こころ

更級郡 姥控 也 家 暇も 共 とも 北山

位徳園 とも ともん は 味 名の 何れ 一里 六丁 とも 一里

歩 銀 難 とも とも 腹 脛 跡 とも とも

都の 啼 ちし 息 つく 味 うれ

木曾路 昔 茶 袋 機 械 とも とも 見 け 里

義仲城址 約 香 啼 也 在 丸 今 都 の 木 山

二林 光山 臨川 寺 浦 島 太郎 彦 路

うらうら や ぬ 光の 岩 北 松の 子り

小野 瀑布 裾 とも とも 雲 とも とも 流 北 系

英 濃 國 惠 那 郡 中 津 川 郡 とも

とも とも や かつ とも 木 曾 路 を 出 ぬ 都 の

慶 父 三 十 二 年 の 魂 を 家 舎 とも とも

花の 香も とも とも 雲 とも とも 家 家 とも とも

家を 出 とも とも 旅 とも とも 雲 の 何れ の とも とも け 里

加 納 郡 張 とも とも 傘 とも とも や 雲 の 色

谷 汲 字 とも とも 也 清 き とも とも の 雲 北 系



美濃路 茶の湯やそのりあふ馬のつ  
我道下りふるのりも回りよあふるを笑ふ

藁をたしと揚るう休むけり

笑う原 細うちよ方角あぬ古戰場

松尾村 今も只もりのままよ不破の冥

高物かゝりの 浮つたの城もあつたよ美濃近江

唐針味望湖亭よいこふ

長門をわ引るよき竹生島

多賀社あ ぬのはくや花のまねを旅らるる

勢田 糸をききみなり橋のうへ

若山

花の湯や書く事多き旅日記

若山名旅人 うち能く見えられ

粟津 春風也吹せよとてあつたり

若狭寺 志多きよ 神よあはれ花の露

大津路よき 石山も三井 ちよんを日におき

湖上船を 舟をきき 夏もあつたり 舟の海

唐崎 舟をききよもあつたり 舟の海

大津の津を 舟をききよもあつたり 舟の海

早立の津を 舟をききよもあつたり 舟の海

舟をききよもあつたり 舟の海

禁裏拜觀

宮の上は松栞も名もく旅真如

紫宸殿

高き高越仰く左近のまゝく

大内禮院會

しる言法く名もく身は日影り丸

高臺寺

名もくは蘇せつり寺も茶茶

西大谷

春風の吹上りり星眼鏡橋

西京宮中 田行月新よたも

心も静くも花の根のまを明もあ

草もくも人あも静くも 東山

早もくもくの花のまもく知恩院

陽菜もくもくもくもくもくもく

河原まもくもくもくもくもくもく  
雪まもくもくもくもくもくもく  
まもくもくもくもくもくもくもく  
まもくもくもくもくもくもくもく

洋の園を訪しる厚き庭接を謝す

まもくもくもくもくもくもくもく

御室

まもくもくもくもくもくもくもく

龍安寺

まもくもくもくもくもくもくもく

北野天満宮

まもくもくもくもくもくもくもく

金剛寺

よき池よ又よ起まよかきつよ

加茂別雷神社

紫楓やう路をまきつよの青

加茂川を柳きぬりまきつよ

夏もや一人影志常き紀川

神友の影常り終り西の京

昭よ阿うぬ山川ありま京は夏

東福寺通天橋上

あま路よおりまたうぬや影

西京は清路よ餘波を惜ま

別堂んとまきつよ神宮き路うぬ

淡川舟中

時をきき一島ゆく灯を返

大坂より淡州多浪津港へまき

海の夜やまきつよいあま

まきつよあまうまきつよ

あんなく時をきき一茶坊の

住味ありまきつよ一茶坊の

移り我も金毘羅へまきつよ

桑原神社

桑原まきつよ此風よまきつよ

横河津路神戸上陸

昭まきつよ夏けまきつよ

須磨 若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

若くして魂奪をせぬ望みの時の旅を志すは

志すは旅のついでに思ふに屋敷籠

懐古 夏に旅のついでに思ふに屋敷籠

舞子に旅のついでに思ふに屋敷籠

明石のついでに思ふに屋敷籠

阿波のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

別府のついでに思ふに屋敷籠

多岐のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

神戸のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

若くして旅のついでに思ふに屋敷籠

家井 大坂や長し町やまき 橋のき

客舎よ病をけるは僕をけりあり

ひき起るおけしき 又よ杜 あり

後僕五福修一旬は病の床よりおけしき 良醫の執せしき

あひまわく終るよ大坂地下は過客とるありぬきしきへはね

お常とるをすしきかゝる 夏幸の出其ぬるをぬ且の園より

主守の彼をきりおけしき 思ひやせしき 嘆息し

神よふるをみくれ 定まらぬしき のり

天下茶屋を路をきりしき

抽のききや きのくゆりき 古井 翁

極楽神社 涼しきやおぬけりしき 常 右 燈

志立町杉田久太郎庭あり

浪屋の杉やおぬけりしき 志ぬき

妙園寺 日中もさきき 藤 鉄の 敷法 寺

虎の陣より高野山へのゆるき 百五十丁 旅中 あり

あゝ 喰咀ふる 道路を 経る

山 登りや 反 常 あり 吹 きの 敷

清澤の院 あり 咲きけり 皆 夏 色 あり 御 山 あり

高野の霊山ふるき 世人のきき 家ありしき 今更何をり

いん真の院よ 語けしき 古木 表 徒と 茶 燈の あり 吹 きの あり

よ心年おのつうはせしうり父母の志をうよ無しといふ言  
吟よ感しうそ後よ涙をきしきぬ

父母の 情 うはせ 苦しーい

國元出校の折らた同りしうそ後よ涙をきしきぬ  
石城邑北四名を詣とら後の異ふをたよそ又途中よめり  
逢ん子を物しう大坂より先よ世にせり後後後  
予とてうり此女と只三人よあうぬりふの行路を車駕のきこの  
福いとそ是を後房よ着履せつる若くは衣箱やうの物も  
ふらうとてあう肩よ引うぬりよし一物の西へけの向う  
祖翁の紀行よ碓草紙茶屋留布と物よをきしきぬ

世あふし母の心と腸よそく力なき身の弱しうそ  
うそとて是を後房よ着履せつる若くは衣箱やうの物も  
福おのりきしきぬ

湯水や茶室中一ふよ峠茶屋

りや ーいまー 一や一暇子木の茶室山

梅をせうと此時命よあをぬるあを運ばる

茶室からや探さるあをむ松 笠

ぬき輪ちへ行途中

るりり梅の 茶室 ーい

寶物開帳 仰き見るを此をのりてぬき輪寺

後醍醐帝陵よぬのつき

澄みたり清水をむきし旅人

小楠公

埋髮墳

美ら名をとりぬるまじき山

淡山神社

夏志ぬ未立うけし多試の峰

神遊

是道一社舟もまじき初瀬寺

奈良

若のよまぢめをうり旅人

衣の帯

柳のむのけりをばり

はくくくとりて重なる柳

いよへの八重梅を折る群のこぼりつせと根をえの

よみ来や成育しる産路を築くんとを

葉さくららも毛とあそび世古都

名張山中

病葉のちあをさる空一ほんのこけ

今更園

名張路

人のゆく着蒲をさるる草鞋うれ

伊賀伊勢の國境まじ味

旅ゆくら労せぬさめん梅の空

松坂より山田より空舟

積る田をとりて我里をあらしうら

皇大神太子神樂奏行

うきうきあそび風や柳のとより想をり

橋よ

木影よりあよ草をり五十鈴川

古市傳を屋のまゝ橋よ遊し

一やりの美をくさくさ〜 蘇子と

日あつたかよ風あつたよき二見の浦の風景

画よ見〜も連をぬ岩をぬらふ

津よ〜 耳も耳も果なき所〜 雲の峰

葉名流亭 門のまゝ〜 船場や飛あふ

佐古 細らうらふ船場〜 舟のまゝ

津富社 舟のまゝ〜 神の馬

名古屋の運目〜 雨會よ世にたふ風子のまゝ

うらむ 雲の門あつた〜 舟のまゝ

熱田神宮よ 話よ こと〜 葉もあつた〜 蘇末之林

鳴鶴 夏ゆ〜 舟のまゝ〜 後り 店

鳴鶴の神下 神氏を流ら〜 舟のまゝ〜 祖の

生々〜 舟のまゝ〜 舟のまゝ

見ると〜 舟のまゝ〜 舟のまゝ

舟舎 舟のまゝ〜 舟のまゝ

今川義元の古墳を尋ね

舟のまゝ〜 舟のまゝ

天鏡川の架段〜 舟の長さ〜 舟のまゝ

標を〜 舟のまゝ〜 舟のまゝ



休しし細海を過ぬ橋のうへ

山夜中 古道也 杖先のこけり 暮色

物る原 見初らるる山 高士の山

金谷を過る 風のそよぬ 大井川

名前の跡より 尾張の祖原 風は

夜より更なり 弘法大師の 跡を

夏の夜は 互の跡を

所見 旅人の 夜半部の山

うつの名 十重の 枇杷の宮

柴屋寺 室の 月峰

静思公園 葉しゆくや 木あり 桜

四名の回 木あり 木あり 木あり

昔水は 花あり 旅の

久能山 唯よよ 山あり

清見寺 今より 夏

旅を 見たり 山

山邊 人あり 山

箱根山 駕昇り 山

雲霧を 山あり 山

東海道の坂交のちあまの若くはけつとて東の谷宿山中

やうき 旅のゆくおもしろ 坂の谷の宿うら

町立庵の西上人の若を思ふ

水滸の山に在る花の夕アウカ

江の島 堀の形 橋のぬいぬいのうら

同安旅店 浪をたぬうら 枕や明やを

鎌倉八幡宮 立ちあがりふ帯 舞末をほし 舞の若

鎌倉や今も 春の若を思ふ

横濱港 表はくくる 帆をくく 涼一夕あがり

蒸氣車中 又くくく 後ろくく ぬきぬき

蒸氣車をくく 船をくく を過す

町中よ 蒸氣車 けりく 風をく

石見茶亭 桐干や 蓮の浮葉よ 多しとく

福田堤遊水 水くくく 足初をくく 都を

夏の夜に 名よ ありよ 柳を

鎌倉神社 境内 水くく 柳木くく 風を

泉岳寺 義士の墓に 訪る

清の 一花を 向き ぬきく

龜井戸 天満宮境内 若柳や 実を ちりて 下納涼

柳島を 通る 水に 降る 風を 飛雪う 柳

吾原仲の厨 夏の夜や月もくづの光を昇るさま

夜景 日くらり 下等やあつ後とも其の橋 うち

日景 日景 唯もあきまふあきまふ 人の中

東原別 陣もあきまふあきまふ 都人

栗橋茶店 新まきまき 利根の川風吹あけ

古河の陣を過ぐ途上遠望

よく晴るまきまき ゆきあけ筑波山

陸羽街道 まきまき 又折るまき

日光への向う 仰きあがるまきまき 或は

途中

日光東照宮 日の匂い涼 夢の心は思

度前

那須野 石合布 燈籠のつらみあきまふ

神の影は白妙よ 夜の星は咲きまきまき

心地をまきまき 白川の舞まき

原や ちりまきまき 山に雲

安達原 雲霧のちりまきまき 雲の峰

福島 うらまきの花まきまき 花の山

あきまきの花まきまき

あきまきの川風まきまき 夕柳

仙臺岩井 雲霧のちりまきまき 花の山

吟行 宜味野也夏のうらたのら萩の巻

多賀城隈四 汗をきぬき石ふみそを居た

塩竈 美天也只新ふる子賀の浦

親浦亭 四由也倉うき子相島

瑞巖寺北山禪師を宿も

色もまもは清一清寺のたけ

富山より 相島やまき味もわき

野蒜開港場 浪うちの土壁まきうき

官城縣名の寒港より岩子ぬ感是速山

早者余里 水多月の川流うき

所目 夕まはせむるまきぬ光

海舟に艘りたけま衣川

南部道上 十里海よりお水

日中の美熱をくくくくくくく

見もくくくくくくくくく

秋田縣よ入る二井田村よ

寐をぬき我里遊き改修

夏夜の小きぬり土産よ旅

七月廿四日 海峯

明治十四年己年

弄月園藏板

鹿齋

陸波西邨 逸齋自吳



摺物板木彫刻所  
東京漢町三丁目番地  
鈴木傳次郎

Vertical black ink scribbles and characters, possibly a signature or title.

一也

永持

